29.11.-2

伊豆市議会　　第一委員会

行政視察報告書

平成29年11月2日
報告者　永岡　康司

平成２９年１０月１０日（火）14：00～16：30　熊本県山鹿市役所

目　的　・　中心市街地大衆浴場「さくら湯」の復興
　　・　歌舞伎芝居小屋「八千代座」明治43年建設
　　その他観光施設・文化の観光活用について

熊本県山鹿市の概要

山鹿市は、平成17年1月15日に山鹿市・鹿北町・菊鹿町・鹿本町・鹿央町の１市４町が合併し、新たに「山鹿市」として誕生した。

山鹿市は、菊地川流域に広がる豊かな田園地帯で、北部は緑豊かな山林に覆われ、ここに源をなす岩野川、上内田川などの河川が菊池川にそそぎ、この流域を中心として田園風景が広がり、幹線道路網が放射状に発達して、歴史と伝統に育まれた文化の薫り高い地域です。

人口の概要

平成17年の合併当時は、57,726人であったが、平成27年は52,264人となっており、将来人口も減少傾向が続くことが予測される。

山鹿市の歴史的文化遺産

＊さくら湯

今から約３７０年前に細川藩主のお茶屋として記録が残る木造温泉（さくら湯）。明治初期の大改修以降、市民温泉として親しまれてきた。昔の面影をそのままに再現されて、唐破風のある南北の玄関や十字にクロスした独特の屋根の形、貴賓客が使用した「龍の湯」など、江戸時代の建設様式を可能な限り再現したさくら湯は、道後温泉本館「坊ちゃん湯」の建物を思い出す歴史を感じさせる建物であった。

＊八千代座

明治43年（1910）年、旦那衆と呼ばれていた山鹿の実業家たちが建てた芝居小屋。2010年に建設100周年を迎えた。江戸時代の様式の中に回り舞台などを備えた造りで、歌舞伎や郷土芸能などの催し物が現在も続けられています。（大正12年頃が一番親しまれ、栄えた時代でした。その時代の遺産を受け継いでいます）

＊山鹿灯籠まつり　古代から続く、灯りの祭典

その由来は、濃い霧に行く手を阻まれた景行天皇の一行のご巡幸を、松

明を掲げた山鹿の里人がお出迎えしたと言われている。二日間にわたって行われるお祭りは、「奉納灯籠」「よへほ節」の調べにのせて、頭上に灯籠を乗せた女性たちが優雅に舞い踊る「千人灯籠踊り」。

幾重にも重なる灯りの輪が見る人を幻想的な風景を見ることができます。

さくら湯・八千代座は熊本地震によって一部破損しましたが、市民の熱意と心意気一体となって復興に努め、現在は心のより所として親しまれています。

視察の感想

山鹿市にある数々の文化遺産・昔から続いている文化芸能。市民が大事に守ってきた、街を愛する心を見ることができた。それが観光であり、訪れる人たちを明るく迎えてくれた。

熊本地震でまちの再建が始まり、歴史的資料館・建造物・景観を活かしたまちづくりが行われた。「自分たちの歴史・文化は自分たちで守る」行政でなく、市民一人一人が街を守る成功例ではないかと思います。

平成 29 年 10 月 11 日（水）9：40～11：45 熊本阿蘇大橋周辺視察

目　的　阿蘇大橋災害状況と復興状況

阿蘇大橋は、1967 年 4 月着工 1970 年 12 月に完成した。橋長 205m、谷底から 76mの高さにあった。開通後、阿蘇大橋から投身自殺が相次ぎ（59 件）忍び返しのフェンスを設置し自殺防止対策の結果、以後 4 件にとどまっている。

2016 年 4 月 16 日に起きた「本震」で西側の山が、長さ約 700m・幅約 200mにわたって崩落が発生、豊肥本線・国道 57 号線もろとも阿蘇大橋は橋台と桁の一部を残して崩落した。地震後、阿蘇市の大学生が行方不明、二次災害の危険性から捜査活動は断念された。その後、大学生の家族・友人らによって 8 月遺体で発見された。

復旧は、同じ場所での再建は困難として、600m下流に橋をかけ直すと発表。2020 年度までには全線開通を目標に工事を進めると発表。
私の思われる原因は、阿蘇外輪山は約 9 万年前に起こった巨大な噴火により阿蘇カルデラの原型と周囲の独特な地形により、火山灰によって形成された外輪山は軟弱で、今回の二度の大地震でさらに軟弱になり崩壊したと思います。

阿蘇道の駅（阿蘇）自由見学

阿蘇登山道・国道 57 号線・国道 212 号線が交差して、正面南側には阿蘇山がそびえた自然豊かな景観を備えています。

特にインフォメーションセンターに案内人が待機して、何時でも地域の情報を聞く事が出来ます。店内は、九州（熊本）では有名な、馬刺し・燻製・馬油・くまもんグッズ等地域の特産品が多くみられた。

駅のイチオシ情報・この駅のイチオシは周辺にある、阿蘇の自然・歴史・文化等を散策する散歩道があり、ボランティアが散策コースのテーマにあったコースを案内しています。

平成 29 年 10 月 11 日（水）15：30～熊本市役所行政視察

目　的　熊本地震の被害状況と復旧・復興について
　　災害時の議会対応について

熊本市の概要

熊本市は、九州の中央、熊本県のほぼ中央部に位置する。

有明海に面し、坪井川・白川・緑川の３水系の下流部に形成された熊本平野の大部分を占めている。

また、阿蘇山と金峰山系との接合地帯にあり、数多くの山岳、丘陵、大地、平野等によって四方を囲まれている。

古来、阿蘇からの伏流水による地下水が豊富なことや市内にいくつもの川が流れていることから、「緑潤う、森と水の都」と呼ばれている。

熊本市の人口は？

平成 19 年 10 月 670,179 人・平成 29 年 10 月 737,812 人（10,1%の増加）

熊本地震とは

＊ 2016.4.14　21：26　　マグニチュード：6.5（益城町）最大震度：7.0
＊ 2016.4.16　　1:25　　マグニチュード：7.3　　最大震度：7.0

地 震 回 数

震度：7.0 の地震が続けて 2 回発生（観測史上初）
一連の地震で震度 6 弱以上の地震が 7 回発生（観測史上初）
余震の発生回数（累計）は、4,364 回

人的被害

住家被害：全壊：半壊:　53,325 件　一部損壊：　80,762 件

宅地被害

がけ崩れ被害個数：　4,300 戸　液状化被害戸数：約 2,900 戸

復旧と再生

＊5 月 10 日に全ての市立小中学校が授業を再開；体育館を使用（4 月 15

日から休校だった。）
＊熊本城の崩壊の情報収集：市内の災害状況の把握：災害対策本部設置
被災者支援（総合相談窓口）解説（5月17日・一カ月後開設）
災害見舞金等の生活再建支援に関する申請受付や各種相談に応じるため、被災者生活再建支援のための相談窓口を各区役所に設置（ワンストップサービスで受付）

被災者支援

仮設入居者支援：被災者がそれぞれの環境で安心した日常生活が営むよう、孤立防止のための見守り、相談・生活支援・住民同士の交流の機会の提供。

第7次総合計画

めざす町の姿：市民が住み続けたい、だれもが住んでみたくなる、訪れてみたくなる、【上質な生活都市】
基本方針：市民力・地域力・行政力を結集し、安心な」熊本の市政と創造

復興重点プロジェクト

＊一人ひとりの暮らしを支えるプロジェクト

＊市民の命を守る「熊本市民病院」再生プロジェクト
＊熊本のシンボル【熊本城】復旧プロジェクト
＊新たな熊本の経済成長をけん引するプロジェクト
＊震災の記憶を次世代につなぐプロジェクト

壊滅的な被害を受けた市民が、一日でも早く安心で自立的な暮らしをとりもどす事ができるよう、現状把握に努め、住まいの確保支援や心のケア等生活再建に向けた総合的な自立支援が必要だと思います。

災害時の議会対応について

市議会の動き
・発災以降、議員は地域の被災者支援、実情・要望把握活動等実施
＊議員からの情報、要望等は議会事務局から災害対策本部に報告。
＊4月19日主要会派による代表者会議を開催、震災について協議。
＊5月10日議長及び市長が、関係府省に対して、熊本地震に関する要望活動。
議会と事務局
＊議員の安否確認については、携帯電話もしくは自宅電話によるとしたため、相当の時間を要した、緊急時の連絡手段として、電話以外の手段を確保する必要があった。
＊議員からの要望・提言については、議会事務局を一元窓口として、議

会事務局から災害対策本部へ報告するルールを周知するも、議員が直接執行部へ申しいれを行う場面も多々あったことから、さらなる本ルールの周知徹底が必要であった。

平成 29 年 10 月 12 日（木）9：30～11：30　熊本県益城町仮設庁舎

目　的　熊本地震の被害状況と復興・復旧について

益城町の概要

郷土「益城」は、熊本県のほぼ中央北寄りに在り、県庁所在地熊本市の東隣りに接しています。県庁まで 8.5 キロメートル、熊本市役所まで 13 キロメートル、また、空の玄関口である阿蘇くまもと空港まで 7.5 キロメートルの至近距離にあります。町の周りは西から北西部にかけて熊本市、北部が菊池郡菊陽町、東は阿蘇郡西原村、南は上益城郡御船町、南西部が同郡嘉島町になっています。

人口：33,001 人（平成 29 年 2 月末現在）：伊豆市より少し多いい。

熊本地震災害

高松市と同じく、二度にわたる地震を受け多大な被害を受けた。

死者：　直接・間接の死者は 40 人　重傷者：122 人

全壊・半全壊は 6,259 棟

町内の被害状況：地表面に現れた派生断層（地表のずれ）・被災した庁舎の渡り廊下の落下・町内の多くの家屋の倒壊・水田断層のずれ（約 1,5m）

道路の断裂・土砂崩れ：非難する予定の体育館の倒壊等

避難の実態

4 月 14 日の前震発生後、指定避難所が開設されたが、余震が続いたため青空避難者や車中避難者が多数発生。公民館や自宅の庭先、畑のビニールハウスでの避難者も多くいて、避難者の全容把握は困難をを要した。

益城町の復旧・復興状況

町内に、１８箇所・1,562 戸の仮設住宅を整備し、６月１４日から入居開始。入居者の孤立化を防ぐため、仮設団地内に集会所として、「みんなの家」を整備。

＊訪問当時の損壊家屋の解体状況は 95％で、町中では倒壊家屋を見るようなことはあまり無かった。１０月末までには全戸撤去する予定。

復興計画策定に向けての町長方針

「今回の地震被害は町全域にわたっており、阪神淡路大震災、中越地震や東日本大震災の被害要因を合わせ持ったような被害状況である。

このような状況の中、町の 10 年後、20 年後等の将来の姿を見据えたまちづくりを行うに当たっては激しい道のりとなるが、だからこそ【住民の声・想い】を大事にして、その意見を反映させたふいっこう計画を策定する。平成 28 年 6 月 1 日復興課を新設：住民主役の復興計画策定に着手。

益城町28年度定例会議一般会計予算より

平成28年度の益城町一般会計予算当初予算111億6,453万円が現時点で309億5,705万円となっている、約200億円をこれまで要している。

この先、復旧復興には相当の事業費が必要となる。国に対して100%近くの支援をお願いしていくことが重要。

＊熊本益城町復興課の皆さん、長時間にわたる丁寧な説明をいただき有難うございました。早い時期の復興をお祈りします。